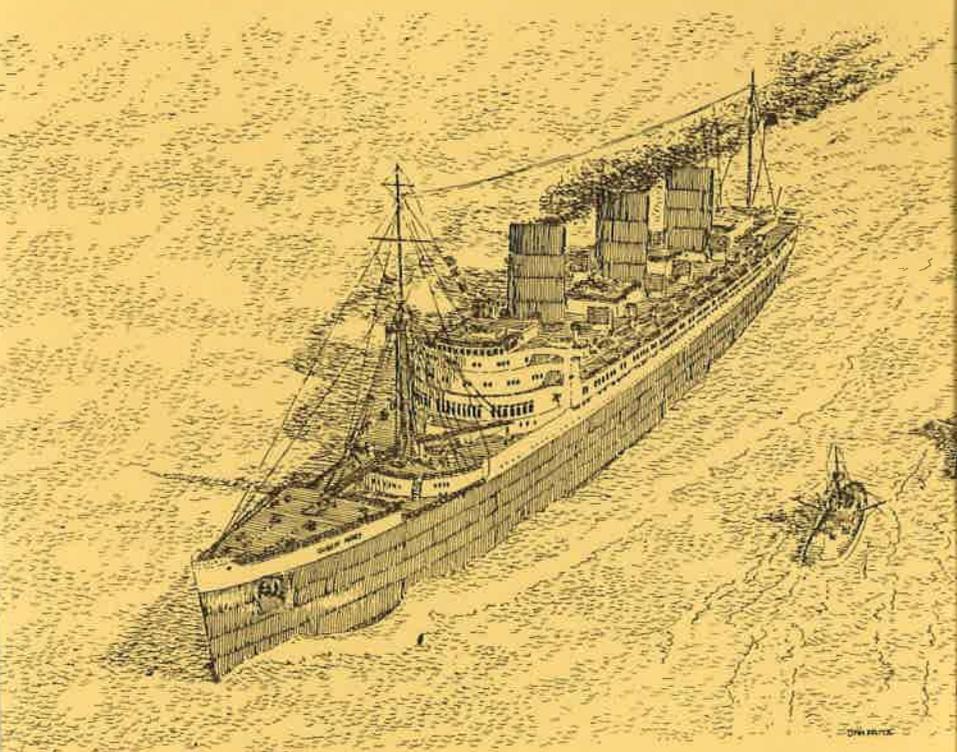


月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



第16号

海文堂書店 1983・7 [16]

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10

(電)

目次

海文堂案内板	30
郷土誌の窓	25
本ものということ	22
異邦人 T・O	22
坂の上の家 — 異人館散策記 —	18
真砂 早苗	18
むかしスズラン灯の下で	14
もとまち	14
林 喜芳	14
小松菜の花	11
— 昭和二六年の「小学三年生」正月号 —	11
植村 達男	11
『神戸の野球史（黎明記）』を読む	8
大森 尚	8
棚田真輔	8
稲日大女郎と穀霊	2
松本 翠耕	2

稲日大女郎と穀霊

松本翠耕

加古川市の北郊に、日岡神社がある。またその隣接地には日岡陵とよぶ古墳もある。神社の祭神は天伊佐佐比古命・豊玉比売命・ウガヤフキアエズノ命・天照大御神・市杵島比売命の五柱になっている。

この神社は現在では日岡神社とよばれているが、平安初期の『延喜式』という古書には、「日岡坐天伊佐佐比古命神社」と記されている。だから本来は天伊佐佐比古命だけを祀っていたのだろう。『播磨風土記』では祭神を別の神の名を記しているが、いまここではそのことに触れない。

では、天伊佐佐比古命とはどんな神だろうか。

伊佐佐比古を祀る神社は、ほかにもある。その代表的なものは福井県敦賀市の気比神宮で、ここでは伊奢沙別命となっている。伊佐佐比古も伊奢沙別も表現は異なる

が、これは同一神である。

気比神宮の伊奢沙別は筭飯大神とか御食津大神ともよばれていて、食事を司る神といわれている。

但馬の豊岡市にも気比神社があり、やはり伊佐佐比古を祀っている。

敦賀から若狭・但馬にかけての地方は、古くから朝鮮半島の新羅国との間で文化面や人事の面でも交流があった。このことは『三国史記』の「新羅本記」にも記されている。

但馬にも新羅からの渡来者が定住した。この渡来者のなかに天日槍あめのひこという新羅国の王子がいた。天日槍は但馬に居住し、その子孫と自称する人物が大和政権の支配下に入った。詳しくは『古事記』や『日本書紀』に記されているので、ここではくわしく述べない。

天日槍は実在の人物とは思えないが、新羅国王の支族が但馬地方に渡来し、この地方を支配したのは事実だろう。その首長を天日槍という名にしたのだろう。

天日槍と天伊佐佐比古・天伊奢沙別は同一神だということになっている。日槍が但馬に渡来したとき各種の宝

物をもってきたが、その中に、イササの太刀がある。イササは伊佐佐に音読が似ているというより同音であるから、天伊佐佐比古・天伊奢沙別はむしろ日槍が奉信した神であったのか。あるいは日槍の投影がイササであるのかも知れない。伝承話であるので確実なことはいえない。

天日槍は新羅国王の子で但馬に渡来し、土地の豪族である前津耳さきつみみの娘、マタヲと結婚する。前津耳は日槍よりも先に渡来したという意味の名で、やはり新羅人だった。朝来郡和田山町、もと養父郡糸井村に佐伎都比古阿流さきつひこあるちのみこと知命神社という古い神社がある。佐伎都比古とは前津耳のことで、阿流知命というのは新羅国王家の金氏王室の始祖といわれるアルチ王のことである。こうしてみると、但馬地方には新羅からの渡来者が数多く居住していたことがわかる。しかも祖姉王を祀ったのだから、王家と関係の深い有力者だったと思える。

これらの新羅人が漸次南下して播磨に入ってきた。その人達は日槍伝承話をもっていて、加古川河畔に神社を創設した。それが天伊佐佐比古神社、現在の日岡神社である。

加古川の西側を印南といっているが、古代ではイナビとよんでいた。ここに稲日大女郎という景行天皇（オオタラシヒコ）の后となった人が住んでいた。現在の日岡陵が稲日大女郎の墓だというが、これも伝承話にすぎない。

印南の語源が稲日でイナビとは、実は稲の霊のことをいい、稲霊は穀霊・コーンスピリットのことである。

さきにも触れたように天日槍を奉信した新羅からの渡来人は、但馬の糸井村にアルチ王を祀る神社を創建した。そして中国山脈を越えて播磨に入り、加古川の河畔にイササを祀る神社をつくった。イササは日槍である。

日槍は新羅国王の王子で、その祖先の金氏王室の始祖はアルチ王だった。新羅語のアルチは穀霊を意味し、倭語では稲霊という。加古川の西部地域をかつては稲日といっていたのは、アルチ王の子孫の日槍を奉信する人人が居住し、始祖王の名にちなんだイナビを地名にしたと考えることができる。

ただ渡来人たちは稲日大女郎という伝承話の人物をつくり、オオタラシヒコ（景行）というやはり伝承上の天

皇の后となることで、大和政権とのつながりを示す話をこしらえた。

オオタラシヒコと稲日大女郎との仲介の勞をとったのは息長命おきながのみことという人で、息長氏は息長帯比売おきながのひめ（神功皇后）と同系譜の人だろう。息長帯比売は天日槍の子孫だろう。ここにも日槍との関係がある。

これらはその殆どが伝承上の話にすぎないとはいっても、新羅からの渡来者が繁栄した土地だから、このような物語りが生れたと考えられる。

さらに穀霊―稲霊が、稲日・印南と変化して現在の地名となったことも忘れてはならない。

日岡神社の隣接地の丘の上に日岡陵とよばれている古墳があることは前にもいった。いまは宮内庁の参考陵とされているようだが、これはオオタラシ（景行）の后、稲日大女郎の墓だということからだけのことである。『播磨国風土記』によると、稲日大女郎が死亡したので遺体を担いで加古川を渡っているとき、ツムジ風が吹いて遺体を流してしまった。そのとき遺体を包んでいた衣服のヒ

を奉信する有力な人だったのだろう。

私たちは幼少の頃、飯粒を粗末にすると罰があたる、とよくいわれたものだ。

東アジアの農耕民族は穀物―とくに米穀には霊が宿ると信じていた。それが穀霊である。コーン・スピリットであり、アルチであり、稲霊である。

朝鮮半島の新羅国王の始祖をアルチ―穀霊としたのも、農耕民族の原始信仰からであろう。但馬や若狭地方にも渡来した新羅民族によって、この信仰がもたらされたのだろう。

穀霊を祀る行事が受け継がれていることは、大嘗祭をみてもわかる。大嘗祭は新らしく即位した天皇が、はじめての新嘗祭に行く儀式で、一代に一度しかない。

大嘗祭が行なわれる場所は宮中に柴垣を組み、その中に悠紀・主基ゆき・すきという臨時に設けられた二殿の中となっている。

この儀式を一口にいえば統治者の復活であり、若返りである。

レだけがみつかったので、ヒレをこの丘に埋葬したのでヒレ墓といった。と記している。

ヒレというのは古代朝鮮の衣服の装飾の一部で、襟に着けたマフラーのようなものだという。だが、これは時代が若干後のことであって、元来ヒレは古代呪術品の一つだった。

天日槍が但馬に渡来したとき持参した宝物のなかに、「風切るヒレ・風ふるヒレ・浪切るヒレ・浪ふるヒレ」がある。海を渡るとき、その航海の無事を祈る呪術に用いたのがこれらのヒレであったと思われる。

大国主命がムカデや蛇の部屋に閉じこめられたとき、やはりヒレを振ってムカデや蛇を退けた話が『日本書紀』に記されているように、ヒレは呪術具であったに違いない。

ヒレの墓は稲日大女郎のヒレを埋めた墓だというのは伝承話にすぎないが、ここにも日槍が持参した宝物のヒレとの関りが浮びあがってくる。

日岡陵は景行とは関係なく、この地方を統治した新羅からの渡来者の首長の墓だったはずである。それも日槍

まずはじめに次代の統治者になる者は、悠紀殿に入る。そこに湯殿が設けられている。ここで湯を浴び、みそぎの儀式を行う。

みそぎは若返りを意味する。

これに従事するのが壬生部みぶべのうちの湯坐部ゆえべの女性である。これらの部民が信仰した神がミルメで、このことは本誌13号に書いたとおりだ。この女性が最初の后となる。

湯殿で湯を浴びてみそぎを行い、ここで水の魂を湯坐部の女性から享ける。水の魂を享けることは、湯坐部の女性と同体化することで完成する。だからその女性を后とみなすことになる。湯坐部の女性は呪術師で、その行為は神がかり的なものである。

つづいて寝所に入る。

ここにはちゃんと布団を置いて、掛け布団や枕も備えられている。この布団のことを『日本書紀』では真床まどこオウフスマと書いている。ニニギノミコトが天降りしたとき、くるまっていた布団である。

この部屋は日光を遮断していて真暗で、神秘性をおびた真床追衾まどこにくるまり、ニニギノミコトと同体化して穀

霊を身に享け新生する。つまり、穀霊と同体化することによって、統治者の資格を得るのである。

この儀式はさきの湯浴と軌を一にするもので、統治者霊の死からの復活を意味する。若返り＝復活の原始宗教の儀式といえる。

このような儀式は農耕民族の儀礼としては普遍的なものであるということは、敗戦後の一時期に三笠宮や柳田国男、折口信夫らによって研究発表された。

穀霊・アルチ。稲霊らはすべて同意義で、東アジアの農耕民族には重大な神であった。新羅ではアルチを国王の始祖として神話をつくっているが、日本の場合はどうだろうか。

神話のなかには食事を司る神の名は多々あるが、穀霊として決定的なものはない。「日本書紀」「神武天皇」の記述のなかに稲飯命がある。神武はウガヤフキアエズの子で、四人兄弟の末弟となっている。

順に言えば、彦五瀬命、稲飯命、三毛入野命、日本磐余彦命（神武）だが、二番目の稲飯命、これはイナヒ。

稲飯命も新羅国王家の出身だというのである。

日本神話と同様、どこまで信用していいかわからないが、新羅からの渡来者が統ぞく倭の国に来たことは間違いない。そのなかには王家からの渡来者もあり、倭の国王になった者もあるのだろう。

このことから考えると、倭王といわれた人たちの多くは、古代朝鮮王家と人事的に深いかかわりがあったと推察することができるのである。

イナヒと訓む。

『書紀』では、稲飯命は神武の東征に同行したが、紀伊国の沖合で海が荒れ船が進まなかった。そこで稲飯は海神を鎮めるといって入水してしまった。稲飯らの母は玉依姫で、海神。綿津見大神の娘だったからであろう。

この稲飯命の名が穀霊。稲霊に最も近い。というより、穀霊そのものかもしれない。それを裏付けるものがある。『新撰姓氏録』という平安初期の豪族の名と由来を記した書物に、次のような記述がある。

新良貴（しらぎ）氏

新良貴氏はウガヤフキアエズノ命の子の稲飯命の後裔である。ウガヤフキアエズは新良国の出身で、即ち国王である。

稲飯命は新羅国王からの出である。

原書はすべて漢文体で書かれていて、その訓みかたには異論もあるが、内容からみてこう訓むのが妥当だろう。

これによると新良貴と名のる豪族は、ウガヤフキアエズの子の稲飯命の後裔だといっている。しかもフキアエズは新良国の国王だったという。だから神武は勿論兄の

『神戸の野球史(黎明記)』を読む

大森 尚

近ごろの書店をのぞくと、たいがい郷土史のコーナーが設けられていて、ふるさとの文献が手軽に入手できるようなった。神戸をふるさととしながら、転勤の多かった私などは、神戸やかつての勤務地、祖先の地を尋ね知りたいと思ったときに重宝したものである。言いかえれば、それだけ地方史・郷土史の分野に属する出版物が多くなったということであろう。神戸について言えば、『のちぎく文庫』をはじめ、多様な出版活動をしている神戸新聞出版センターがその中心になっていて、いわゆる普通の本屋さんの出版に対するよい刺激になっていることは喜ばしい。

聞きおよぶところによると、古くから海事関係の出版を手がけてこられた海文堂が、近ごろこの方面に意欲をもたれはじめたというので、また楽しみが一つふえた。

これまでも、海文堂の月刊PR誌『ブルーアンカー』には、郷土史の書評や紹介記事がいくつか掲載されていて、従来から並々ならぬ関心を払いつづけておられるようなので、きっと良いものを出されるようになるだろう。

ただわが国の流通経路は複雑で、書籍の場合でも、東販、日販など大手取次店の手を経なければ、いかに良書といえども入手しがたいというのも事実である。

表題にかかげた、棚田真輔氏の『神戸の野球史(黎明記)』もその一つで、出版元が六甲出版という、もともとは印刷業者であったものが最近出版事業にも進出した、いわば無名の会社であったせいか、新聞その他で紹介されることも少く、あまり店頭でも見かけなかったし、売れ行きもよくなかったようである。

周知のように、神戸は野球王国であり、戦前の春・夏の中等学校野球大会でも、神戸一中、二中、県商、関学、神港などの諸校が活躍し、幾多の名選手を生んだ。

本書で取りあつかわれているのは、明治二十五年(一八九二)から、大正二年(一九一三)にかけての約二十年あまり、文字どおり神戸の野球界の黎明期であるわづ

かな期間であるが、七七〇頁におよぶ大著であり、収録された試合の記録も二九〇あまりに及ぶ。これだけの膨大な記録を新聞記事、各校の校友会誌・同窓会名簿・創立記念誌などから検索される努力だけでも大変な時間とエネルギーを要されたことであろう。

著者・棚田真輔氏は兵庫県に生まれ、東京教育大学で体育学を専攻され、現在は神戸商大教授として学生の指導にあたられながら、兵庫県・神戸市を中心とするスポーツ史に関する多くの業績をものさかしている方である。かかる多忙な著者がこの大著に挑まれた情熱の源泉は何であろうか。著書が自らその「はじめに」で語っておられるごとく、わが国の野球界の草分け的存在であった神戸で育ち、早慶戦の花形となって日本の球界の進歩に貢献した泉谷裕勝(神戸一中・早大)、陶山素一(神戸一中・早大)、佐々木勝磨(神戸一中・慶大)、高浜徳一(県神戸商業・慶大)、管瀬一馬(県神戸商業・慶大)、高浜茂(県神戸商業・慶大)らに対する愛惜の情と、それ以外の多くの無名戦士たちが、母校の名誉と自らの青春をかけ、汗と泥と涙にまみれた命がけの努力のあとを、

自らの手でのこしておきたいという、一種の使命感によるものであったと思いたい。時移り、人散じ、いつしか限られた当事者たちの思い出話の域に閉じてめられ、やがてはあとかたもなく忘却のかなたに消えさるうとする、ふるさと神戸の野球史を、おのれの命のあるかぎり、後の世に生まれ育つ若い人たちに、かかる先人の努力と苦心と奮闘のあとを知らしめることによって、彼らのこれからの生きざまに、なにがしかの糧を与えたいという、教育者としての悲願、それと著者本来の仕事である、体育史・体育社会学的領域からの洞察が、将来の体育・スポーツの普及発展に必ずや本書が役立つであろうという自信に裏うちされて、読むものをして、切々胸に迫る共感を呼びおこさせるものである。

著者の構想では、この書は三部作になっていて、この明治期の「黎明記」について、大正期の「白球汗と涙の記録」、昭和期の「白球隆盛期」とつながり、『神戸の野球史』として完結されるようである。

昭和五十一年にこの「黎明記」が出てから、この構想が順調に推移しているとは聞いていない。いわば未完の

大著である。六甲出版というささやかな地方の出版社が手がけるにはあまりに大きな事業であったとは言えるかも知れないが、著者積年の努力がこのまま未完で終ることも、この内容からして惜しまれてならない気がする。

昭和五十三年、県立神戸商業と姫路西高等学校（兵庫県尋常中学校・県立姫路中学校）がそれぞれ創立百周年をむかえ、百年史を刊行した。姫路西高では、百年を記念して、「鷲山の秋の夜は更けて」ではじまる応援歌の歌碑が建設されたが、明治十一年創立の同校では、永い間、校歌というものがなく、明治四十五年につくられたこの応援歌がなく、ひろく姫中生たちに愛唱されてきたが、元来は球戯部の応援歌であったことが、本書で明らかになっている。

昭和六十一年、神戸一中（県神戸高校）の創立九十年、昭和六十二年、第一神港商業（市立神港高校）の創立八十年、昭和六十三年、神戸二中（県兵庫高校）の創立八十年、昭和六十四年、関西学院創立百年など、神戸の旧制中等学校の伝統校の創立記念行事が、ユニバーシアードという神戸のメイン・イベントのあとに目白押しになら

小松菜の花

—昭和二十六年の「小学三年生」正月号—

植村達男

我家から歩いて十分の隣町にある両親の住む家に、本を数冊運んでいくことにした。羽根木（はねぎ）にある両親が住む家の二階には造りつけの本棚があり、学生時代使用した教科書や古い文庫等が並んでいる。この本棚には若干スペースが残っており、私は休日になると時々自宅の本棚を整理して、暫く読みそうもない単行本や雑誌を選んで、羽根木の家へ持っていく。

「羽根木へいらっしゃるなら、ちょっと待って」と妻が背後から私に声をかけた。妻は庭に出てムラサキダイコンと小松菜の花で小さい花束を作って私に渡した。花束を手渡された私は無意識のうちに小松菜の花に顔を近づけた。菜の花に似た小松菜の花の香りをかいだ瞬間、私は府中に疎開していたときのことを思い出した。

んでいる。おそらくそれぞれの学校では記念行事の一環として、校史編纂の事業がなされるであろうが、ともすれば等閑視されやすい、課外活動・校友会活動の記述にあたって、この『神戸の野球史』の完成によって与えられる恩恵ははかり知れないものがある。

あえて、兵庫県・神戸市などの地方自治体がこうした出版物に対して助成金を出すとか、神書会のような有力量者団体が広告・販売について共同歩調をとっていたかどうかを望みたい。

最後に、海文堂が新しい書物を刊行されるとしたら、先代岡田社長の旧知の方であった、実業家・画人である故武文彦翁（川崎重工取締役・顧問）の『神戸・兵庫の思い出画集』を出してもらいたいものである。

（毎日放送勤務）

昭和二〇年五月から十二月迄、私は府中（東京都府中市）に疎開していた。丁度私が三歳から四歳になる時期である。その当時、近所の子供たちとママゴトをやったときに小松菜の花の匂いをかいだとか、近くの畑でモンシロチョウでも追っかけながら、小松菜の花の香りをかいだのであろう。しかしながら、今の私には府中で疎開中に小松菜の花の匂いをかいだ記憶は全くない。にもかかわらず、四〇年近く経って小松菜の花の香りが「疎開中の府中」を思い出させたことは不思議なことである。もっとも、視覚とちがって嗅覚は常に刺激を受けているので、「記憶」という点では味覚や嗅覚は視覚にまさるといふ趣旨のことを一九世紀初頭に活躍したイギリスのエッセイスト W. Hazlitt が書いていたのを読んだことがある。

小松菜の花の香りに触発された私は、羽根木に着くと本棚の片隅に数冊置いてある小学生時代に読んだ本の中から一冊を抜き出して持って帰ることにした。私の長男が丁度四月から小学校三年生になったので、私が読んだ「小学三年生」（昭和二十六年正月号）を選んだ。

小学館の学年別・学習雑誌「小学三年生」正月号はA五版・一六二ページ、定価は八〇円で、その下に地方売価八三円とある。目次をみると「星組ものがたり」「まんがカバ大王さま」等なつかしいタイトルが眼にはいる。ところで、ざっと読んでみて驚いたのは、たかが小学生向けの雑誌とはいいながら、実に世相をよく反映していることである。次に三つばかり例をあげよう。

「星組ものがたり」(長谷健)は三年星組に起った出来事連載している。この号ではけいじという少年が星組で飼っているニワトリの卵を盗み出し、病弱の父に食べさせていた話が出ている。けいじは両親に対して「卵は学校で貰ったのだ」とウソをついている。ある晩このことが両親に露見してしまう。

……けいじは、なきじゃくりながら「た、た、た、まごを学校でもらったというのは、うそだったんです……」となりのへやで、ようすをきいていたおとうさんも、「けいじ、おとうさんがびょうきで、はたらけないのが、わるいのだよ。……」

次にあげる「やさしい先生」(後藤有一)となると、もっと深刻な話である。東京で戦災のため家を焼かれた古沢君(小学三年生)の父は、あまり働きすぎたため三年前病気で死んだ。そのため、古沢君の姉は女学校をやめて、町の商工会へ勤め、寿一兄さんも新制中学をやめて大工の見習になった。ところが、母親も病気で死んでしまった。

しらせで、(担任の)我妻先生は、すぐ古沢君の家にきてくださいましたが、ながい間のびんぼうで、そうしきをだすお金がありません。(中略)古沢君は、おかあさんの病気がうつってひどくなっているのです、学校をやすんで、ようじょうをすることになりました。

この部分には崩れかけた壁と破れた障子の部屋で薬を枕元においた古沢君が寝ている挿画(金子茂二)がはいっている。この物語は「古沢君の病気も、みるみるよくなり、九月から学校へゆけるようになりました」と明るい結末をつけてはいるものの正月早々何とも暗い話で

ある。「星組ものがたり」のけいじの父親の病気も、古沢君一家の病気も結核なのである。昭和二六年一月といえば、日本はまだ占領下であり、結核は最も恐しくまたポピュラーな病気であった。

最後に「なぜなぜもんだう」のページを紹介しよう。ここでは、「じどうしゃが、もくたんをたくのは、どういうところが、やくにたつのですか」という質問があり、次のような回答がある。

じどうしゃは、ガソリンでうごくのですが、もくたんをたくと、ガソリンの時とおなじようなガスができるので、そのガスでエンジンをうごかしているのです。

この回答はまちがいではないが、あまりうまく出来ていないとは思えない。また、何故ガソリンをたかずに木炭をたかねばならないかということ迄書かないと親切ではない。昭和二六年当時は結核や木炭車が「小学三年生」という雑誌に深くかかわりこんでいたのである。

むかし もとまち スズラン灯の下で

林 喜芳

新開地生まれ、新開地育ちの私が元町に近ずいたのは大正十五年九月に六丁目宇治川踏切り近くの井上紙店印刷部に通勤しはじめてからのことである。その年の七月六日に元町通りの入口に三越神戸店が開店している。文字通り白亜（はくあ）の殿堂と呼ぶにふさわしい六階建の壮観はその頃の若い私の眼には至極華麗に見えた。私の領域湊川新開地にも聚楽館があり、十二年五月には規模は小さいながら白木屋百貨店ができ、翌年三月には神戸デパートも開店していて洋風の建物は見馴れてはいたが、さすが老舗を誇る三越というだけあって、風貌と言い、雰囲気と言い、あたりを払うものがあった、私など貧乏人（どうも私の書くものは貧乏臭くていけません）が容赦ください）は近寄り難い威風に遮ぎられる。場所が元町と言うだけで私たち新開地人種は緊張した。そこ

は大店（おおだな）が軒をつらねたところ、何一つ買うでなく歩くところではない。汚れた着物、チビくれた下駄を曳きずって歩いては綺羅（きら）を飾ったお店に對してお気の毒であるとの卑下した気持ち私たちにはあった。その玄関口に聳（そびえ）立つこの三越、とても新開地のデパートのように素見（ひやかし）半分でははいれるところではない。（ところがこの三越に文学の先輩が勤めていたのだから驚いた）ずーっとのちの話だが三越は客足こそ少ないが得意先にその頃言われた金満家が多いので売上高は神戸一、店売りよりも外商（外交販売）の方が多いとの風評が定着していたほど格式の高いお店との観念を持たれていた。とにかく私などには縁のないお店、天地の差を感じていた時代である。

デパートが大衆誘致に力を入れたのは大丸神戸店（昭和二年四月）よりのち、そごう神戸店（昭和八年十月）が滝道と呼ばれた現在の場所に開店して、元町とは遙か離れた地の利の不利を克服するために広域の大衆に呼びかけたのに始まる。

さて、話を戻して、活版や勤めの私が先輩職人に聞い

たところによると三越の前身は元町デパートメントストアで、

「うちのおやっさんが建てたンヤ」

と言うのである。私の目が新開地から元町に移っただけで驚くことがまことに多い。

大正十四年十月に元町デパートは華ばなしく開店し、マークが〇のなかに元であるところから一般には元〇デパートと愛称されたと言う。

「そのお祝いに、あのケチなおやっさんが紅白の饅頭と手拭いをわれわれにまで配ったンヤで」

と職人はニッコリ笑っていた。また私の仕事の性質上、年二回の考課状（貸借対照表・損益計算書・財産目録など）を文選していたのでその間の詳細はよく知ることができたが今ここでは書かない。会社の重役陣はすべて井上一族で固められ、油店の井上弥太郎さん、紙店の井上光掌さん（つまりうちのおやっさん）らが筆頭であった。油店の先代弥兵衛さんは明治末年には手押車に油缶を二、三個載せて町中を「油いりまへんかあ、種油にともし油あー」と振り売りに廻った人だと聞かされたが、これが

実を結んでこの元町デパートを建設するまでになったのだから、私には驚異としか考えられなかった。

いま記録を見るとこの元町デパートは当時の芝居小屋（劇場）のように客は入口で下駄を脱ぎ、下足番にそれを預けて店内にはいる。売場にはゴザが敷かれてあって埃（ほこり）の舞うのを防いだらしい。店内を快適にと考えてのこの方策らしいが、一方的に客にこの面倒を押しつけたのが災いした。劇場でさえ棧敷柵席を廃して椅子席に改造されはじめた頃なのだ。明治商法の終着駅。近代的な三越はそれを廃して窓イッパイに明るい陽光を入れて店内ムードを颯爽とした。

いまから思えば想像もつくまいが、当時は神戸駅がこの市の表玄関、三宮駅は現在の元町駅にあつて小ステーション。東海道線の終点で神戸へ来るほどの人はみな神戸駅で降りた。前には湊川神社があり、その東に裁判所、市役所と並び、相生橋警察署、市立図書館も目の前にあつた。相生橋はまた上を市電が走り、橋下を汽車が通過して、神戸ならではの風物詩、一つの名所になっていたので常時の交通量も神戸一、その前に立ちほだかる六層

の三越もまた神戸の名所といわねばなるまい。このようにして人びとの足は自然と元町の通りに流れこんだ。

そんな時、道行く人の耳にこそばゆく聞えたのがレコード店から流れる流行歌

雨の元町、スズラン灯

濡れて光ったアスファルト

若いマドロス、恋あさる 恋あさる

である。元町もすっかり舞台装置ができていた。スズラン灯は大正十五年に完成、アーチ型欧風のシックな電柱に丸い白熱灯が九箇ブラさがっている。それが夜ともなれば白いスズランの花が咲いたように道行く人に微笑みかけた。なごやかなムードである。昼間は裕福な中高年層のお買物、夕暮れともなれば若い人たちの絶好の散歩道、まだ封建思想の残っている人たちも大正デモクラシーに幾らか触発されていたのか、いままでは口にするさえ憚（はばか）られた「恋」の文字も歌の文句とあれば平気で口ずさめる、いや、ここぞとばかり頓狂な声で歌うものさえいた。新時代への開眼である。若さの特権か、「元ブラ」と言う新造語まで一般に滲透した。

たのはこの頃からである。東京の銀座にモガ・モボが潤歩すると、元町通りもフレッシュマンの洪水となる。流行はエキゾチックなミナト・コーベから……。その先鞭をつけたのは元町であろう。

私もよく歩いた。新開地を振り出しに相生橋を渡り、

元町の通りにはいるとくつろいだ気持ちになれた。雑踏混雑の新開地を挑れて元町に来るとゆったりしたムードが包んでくれる。私もいさか成長したのである。友と二人で三丁目あたりまで来た時、赤いネオンで「ヤリトクビ」の片仮名が読めた。

「槍と首って何ンやる！」

連れの友の言葉に一瞬、私も立ち止った。

「物騒なモン売っとるんやなあ」

右横書に書かれた文字は確かにヤリトクビである。近づいて判ったことだが己れの知識無きにつくづく呆れた。

店頭にさげられた長三角の色とりどりの布には「ビクトリヤ」と書かれてある。

「なんやあ、ビクトリヤ、レコード会社の名前やないか」

カタカナは欧文読みに左書きになっていた。右書き右読みしか知らぬ古い頭の私たちはここでも新知識の洗礼を受けた。

元町が新しい街、若い人たちの街として変貌していっ

坂の上の家

— 異人館散策記 —

真砂 早苗

1

坂道に初夏の明るい陽が溢れている。

私は、路地のような細い道をまたひとつ曲がって、山の手へ続く急な坂を上がって行った。

両側は高い石の塀だ。

塀の上の△忍び返し▽の切っ先が鋭い。

さつき歩いて来た道に、

△塀にのぼらないで下さい。

のぼると110番します！▽

という注意札が下がっていたのを思い出した。興に乗じて破目はずす人がいるのだろうか。つい想像されて、私は何だかおかしさと気の毒さがこみあげて来た。

—— 神戸北野町。異人館界限。

2

六甲山麓の南の傾斜地に開けたこの町は、坂道を歩くところからでも家並の間に港が見える。一帯に残されている明治大正の洋風の建物は、異国情緒と郷愁を漂わせて独特のムードを醸しているが、この町は博物館ではない。現在を生きて、呼吸している町だ。訪なう人には旅心でも、住んでいる人には日常の町だ。公開された異人館と一緒にされて、日常の生活を覗き込まれてはたまらない。

季節の好い日曜日など、細い坂道を雑誌でお馴染みのアンノン族が列を連ねるほどだという。

地域の住人にとって、この町の住み心地は如何であろうか。

坂道を上り詰めると△うろこの家▽だ。

外壁のスレートが魚の鱗片に似たところからこの名があるという。美しいうろこだ。アンデルセンの童話に出て来る△人魚姫▽の海の底の館もこうかしら。

入館料三百円也を払って中に入る。

正面にがっしりした木の階段。磨き込まれた黒い光沢

が歳月を感じさせる。

右手の部屋は民芸品の展示即売コーナー、左手はティルームになっている。王朝風の重厚な椅子とテーブルが扉越しに見える。あんな椅子でゆったりと楽しむコーヒーはおいしいだろうな。

二階は思い切り明るい部屋だ。南に向いた広い窓から港神戸が一望だ。空も海も陽光にきらめき、たくさんのクレーンが光って見える。

この丘の上から、海へ向かって広がる△坂の町、神戸▽の白いビル。青い屋根瓦。教会の尖塔。緑に萌える木立。都会の持つ華やきと活気が、パントマイムのようにこの丘のてっぺんの異人館にまで伝わって来る。

3

汗ばんだ額に、窓からの風が優しい。

眺望に眼を向けながら、私は今日歩いて来たいいくつかの異人館のことを思い出していた。

カラフルな外壁、化粧煉瓦の煙突。

海に向かって広がるペランダや張り出し窓。

ステンドグラスに暖炉のタイル。

どの家も天井が高く、良質の木をふんだんに使い、さりげなく置かれた調度には、美術品とも思われるほどの風格さえある。

小さな箇所まで行き届いた気配りは、建築者とそこに住んだ人の愛情を彷彿とさせ、それらが歳月に磨かれて、見る者の心にずっしりとした△重み▽のようなものを感じさせる。

そして今、私は今日の異人館散策のしめくくり、△うろこの家▽のテラスルームに立っていた。

空はとびきり青くて、坂道は明るくて、どの家も素敵だったというのに、私の胸には淋しいものがあつた。心の底になぜとも知らず澀んでいく淋しさ。自分でも予期しなかった感情を私はさつきから持て余していた。

—— 異人館。

明治の開国期、異境からはるばると海を渡って来た外国人が、神戸に居住を定め、暮らしを営んでいた家。

夫がいる。妻がいる。子供の笑い声が響く。子供が階段を駆け上がる足音。優しくたしなめる母親の声。来客とともに囲むテーブル。横文字の会話が弾んで、コーヒー

一の香りが流れて……

愛、哀しみ、笑い、涙。

血の通った暮らし、耀いた日々。

時は移ろい、住み手は去り、ひとときの役目を終えた異人館は今こうして△保存・再生△され、神戸観光の代表的顔として私たちに公開されている。

4

今日、いくつかの異人館を巡り歩きながら、私は東京郊外にある△私の育った家▽を思い浮かべていた。

都心から私鉄に乗って三十分。駅からは南へ、心臓破りの急な坂を三百メートルほど上がったところに私の家があった。

異人館と比べるのが笑止なほど安普請のマッチ箱のような家だが、住み手が家に寄せる愛情に軽重はない。

そこで半生を送った父も母もすでに亡い。

浮き沈みの激しい一生だったと思う。戦争をはさみ、細々と経営していた海運業の会社の行き詰まりと倒産。

そして大病。報われることの少なかった人生で、たったひとつ、両親が生きた証しのようなもの。それがその家

であった。

私は結婚後もその家で暮らした。その家で両親を見送り、子を産み、家にまた新しい歴史が刻み始められた頃、夫に転勤の辞令が出た。

紙切れ一枚でどこに飛ぶやらわからない転勤族は、△根なし草▽の方がいっそ潔い。転任地へ赴く前に、私はその△形見の家▽を処分しようと思った。不動産屋を通して話は決まりかけた。条件はほぼ満足すべきものであった。

あと何日……

住める日が限られてみると、私の脳裏に折々の思い出が、とつとつに切り捨てていた思い出や、セピア色の向うにくすんでいた思い出までが一挙に息を吹き返した。柱の傷、壁の汚れ、天井のしみ、花壇に咲く花、庭の木のをよぎ。

そう、父と一緒に植えた枝垂れ桜も――。

細かった木も少しずつ年輪を重ねて、春になると小さな庭をその腕に包み込むように美しい花の世界を作り出す。それは狭くとも、家族にとっての桃源郷であった。

その下にごさを敷いてお花見をしながら、父の和歌の講釈を聞かされて閉口したことも多い。

炎暑の日の芝刈にはあごを出した。

午睡中、電話のベルに寝惚けて階段を踏みはずし、階下まで転げ落ちて、父に負ぶわれて病院へ連れて行かれたこともあった。

数限りもない小さな思い出ばかりである。

それらを△時の流れ▽と割り切ってしまうには、私は少しばかり過去型の人間でありすぎた。父や母の晩年があまり倅せではなかったために、私の△家▽に対する思い入れは余計に深いのもかもしれない。今となつては、私にのみ価値のあるこの家の末路を見届けるのは、私の義務のように思われた。

△また、きつと帰って来るわね！▽

不動産屋に断りの詫びを入れた私は、その家に一時の別れを告げて東京を去った。

5

感慨に耽っている私の後で、急に弾けるような笑い声が響いた。数人の女性のグループが溢れるような若さを

周囲に撒きながら、屈託のない眼を輝かせている。その明るさは、今の私には眩しい。

△歳月▽という魔法の力は、そこで暮らした人々の笑いや涙を一瞬に掻き消して、今、私の前にあるのは異人館の第二の人生。

住む人も居なくなり、取り壊されて廃材となるよりは、こうして手厚く保護され観光客や散策者にしばしの憩いを提供する方が建物にとっては倅せなのだろう。

しかし、古き佳き時代を凝縮したように、絵や造花や置物などで不必要に飾りたてられた異人館は、いかに美しくとも私の眼には冷ややかで痛ましい。それは老いた女が無理に厚化粧を強いられたような哀しさがあった。

感傷かもしれない。屁理窟かもしれない。

けれど、△家▽にとつての本来の倅せは、建物が老朽化して廃屋になるまで、質素で地味な愛情を持った住人がその家にずっと居残ってそこで暮らしてあげることではないだろうか。

坂道を下りながら、私は△うろこの家▽を振り返った。うろこのスレートは、午後の陽の中で銀色にきらめいていた。

本ものとういこと

異邦人 T・O

京都の河原町姉小路を西へ寺町寄りに入ったところに「ふじ」という居酒屋がある。山小屋風ともいえるその英国風のパブには、芸術を創る人々とそのタマゴの人たちが楽しそうに交歓している。そのカウンターの際にときは一人、又ある時は女性を伴って一人の男が飲んでゐる。それが、詩人中江俊夫その人であることを誰も知らない。また、その詩人も自分が詩人であることを知られたくないのである。

私がいつも、「先生」というと中江さんは「私は先生なんかじゃない。ふつうの男ですよ。それよりお酒飲まない。この次郎丸（お酒の名柄）はおいしいよ」といって、半分は先生ということに対する怒りと、半分は「そんなことよりせっかく隣どうしに坐わたったのだから今日は楽しく飲もうよ」という中江さん特有のやさしい誘い

の意味でいつもお互いに酔っぱらうハメになる。

テレ屋で、それでいて牛乳びんの底のような眼鏡の奥から、いつもは酔っぱらっていても鋭い眼差しで見つめられた経験は私だけではないだろう。「ふじ」というお店は個性的なマスターがいて、安くて料理がうまくて、しかも日本全国の酒がおいであるから、夜毎パッカスの申し子たちがどこからともなく集まってくるのだが、そんな連中がテーブルを囲む時にも、中江さんはいつもそれに加わらず一人でいる。それがちつとも淋しそうに見える、むしろ一人でいることの方を楽しんでいるように「先生、今日は詩人が集まるそうですが、加わらなくていいんですか」というと、「また、先生という。私は先生でも何でもありませんよ。私は徒党を組むのが嫌いでね」といいながら、酒をなめている。

不思議なことだが、そんなことから私はその詩人に魅かれていった。その店には、いろんな詩集がおかれていて、ある時、中江俊夫という名で書かれた『詩の肖像または私自身』という少し厚めの本を見つけた。その本の帯にはこう書かれてあった。

一日のなかで夕暮の位置は奇妙である。

それは単に日常性にどっぷりつかつた朝昼晩の経過の一部ではないし、そんなふうな一日に組みこまれてもいない。一日のなかで夕暮は、朝や、昼や、夜に所属するよりも、もつと近く無雑作に、実にやすやすと永遠というものに結びついて感じられる。夕暮のうつろいやすき、はかなさ、とらえがたさがかえって、永遠というものを思わせるのはなぜだろう。

正直いって私はこの文章に圧倒された。私は夕焼けがたまらなく好きだが、その夕焼けというか夕暮の時間というものを、こんなにまで鋭く、またさわやかに、そしていともあっさり、しかも永遠というものを思っちゃうなんて、すごい詩人がいるもんだなあと思った。

でもその詩人があのカウンターで飲んでゐる、あるいは時には私たちの悪い酒徒仲間と飲んでゐるご本人であるということとを結びつけて考えることができなかつた。こんないい方をして、失礼な話だが、私には時々、中江さんという人は、賑やかに飲んでいながらも、ひよつと

したらこの場にいらないのではないか、とふと思つてしまふ。どこか別の星から来た人ではないかなあと思つてみたりする瞬間がある。

私には詩のことはさっぱり分らないから、時たまそういう詩人と称される人と会うと、すぐに詩の話肴に酒を飲もうとする悪いクセがある。でも中江さんは詩の話をしようにとしない。それは、私がズブの素人だから話したって仕方ない。というものでもないみたいだ。むしろ、自分は詩人ではないんだよ、だから詩人と飲むのではなくて、ふつうの男と酒を飲む、それ以外に君とボクの間には何の偏見も先入観も介在しない、それでいいじゃないか、なあ君、といわれてゐるふうに私には思われる。だからこそ、その詩人を本もの詩人だと思ふ。しかも現在の自称、他称詩人と称するご時世にあつて、希にみる本もの詩人なのだ。

正直に申せば、昨夜からこの原稿を書こうと思つて力んでいたのだが、なかなか書けない。いつもいっしょに飲んでゐる中江さんの顔が浮んでくる。つまらないこと書くなよ、なに、ボクのことを書くんだつて、やめとけ

よ、そんな暇があるんだったら飲もうよ、とでもいわれるような気がする。だから昨夜からずっと大酒を飲んでしまい、一度は書くのを止めたと決意した。別に誰に頼れたわけでもなし、中江さんのことを俺が書くなんて僭越だと思えてきた。しかも詩のことに関して何も知らない門外漢のこの俺が……。

ただ、私は本に関わる仕事をしてきて、本ものの人、本ものの本と出会うということはめったにない。でも、まぎれもなく中江俊夫という詩人——ひよっとしたら異星人かもしれないが——は本ものであると確信する。そして、それを知る一つの手がかりが、『詩の肖像または私自身』（水夢社刊）という本である。

本ものの詩人と出会いたいあなたに一読をおすすめする。

郷土誌の窓

神戸史学会のメンバーが十数年がかりで調査してきた神戸市内の道標の記録がまとまり、「歴史と神戸」の特号として今年中に刊行されることになった、と五月二十一日の神戸新聞は伝えている。記事によると、研究してきたのは明石市の永瀬巖さん、中央区の山下道雄さん、長田区の沢田幸男さんの三人で、これまでに神戸市内の二百七十一個の道標を集めた。原稿は一昨年まとまり、同会の落合代表が神戸市教委に持ちこんだが財政引き締めで約三百万円の予算は二年連続で却下されてしまったといういきさつがあり、同会の機関誌の特別号として発行することになったもの。ただ、問題は道標の位置を記録した二万五千分の一の地図の作成費用百万円。このお金が捻出できないため、今のところ写真と解説だけになりそう、という。関心あるみなさんのご支援をお願いいたします。お問い合わせは左記まで。

千六五三 神戸市長田区川西通

神戸史学会

(電)

* * *

各新聞紙上に紹介されているが、長田区に伝わる民話や行事の話九九編を集録した『ながたの民話』が長田区役所から出版された。神戸史学会会員の田辺真人さんが先輩や教え子の教諭、大学生ら八人と三年がかりで、区内のお年寄り三十五人から聞き取り調査してまとめたもの。長田区在住の漫画家丘あつしさんの挿し絵や写真、古地図も盛り込まれている。

長田区役所広報相談課と、三宮のさんちかインフォメーションこうべで発売。一冊四〇〇円。

* * *

鈴蘭台高校の民俗研究会（森栗茂一顧問、十五人）が、神戸市北区淡河町僧尾の詳細な民俗調査をまとめた。指導している森栗さんが自費で報告書（三百部限定、A5判、七十二ページ）を出版したと、五月一日の神戸新聞に報道されている。記事によると、報告書は図解をとり

がその本だ。内容は「海を見おろす五色塚」に始まり、「赤穂の塩づくり」「かえってきたジョセフ・ヒコ」「摂津西宮のうちこわし」「畑になった甲子園球場」など十の物語が盛り込まれている。五・六年生にお母さんの口で読んであげて欲しい、素晴らしい歴史の本だ。

＊ ＊ ＊

もう一冊、小学生向けに作られた郷土の本を紹介しよう。県下の児童文学者の手で執筆された『兵庫県の民話』（偕成社発行・九五〇円）がその本だが、どの民話も史実を基礎において、小学生にもよくわかるように書き込んである。丸川栄子さんや小林祥光さんなど児童文学者の手で兵庫の〃五つの国〃から多彩なむかし話・伝話が収録されており、たのしい内容になっている。児童書ゾーンでご覧ください。

＊ ＊ ＊

神戸新聞出版センターから最近『ひょうご味の旅』（四八〇〇円）が発行され、高い本ながら質の高い造本と内容で手にとる人が多い。味の本、味覚の本には違いないが、風光や歴史・史蹟など〃周辺ガイド〃を折りこ

んだこの本は、県内の四季おりおりの厳選された味をその自然の中で味わうのが一番という思い入れによってできた、味の本であり旅の本。旨そうなカラー写真が食欲をそそる。

＊ ＊ ＊

保育社の▲カラーブックス▼の新刊は『山陽電鉄』（日本の私鉄シリーズの27冊目）。前に発行されたこの欄で紹介した神戸電鉄と同じで、車輛の紹介とともに、会社の沿革も書きこまれ、鉄道ファンには楽しい一冊になっている。定価五〇〇円。

＊ ＊ ＊

京都・大阪・神戸の三つの都市の表情を衣・食・住。人などのさまざまな角度から描いた『三都物語』（一〇〇〇円）が大坂書籍から発行された。同じ関西にあって異なった三都の素顔を、面白おかしく、時には数字を並べて較べている。朝日新聞に連載されたものの単行本化。三都の〃市民意識と生活〃を問うたアンケートもなかなか味わい深いものがある。

＊ ＊ ＊

兵庫県自然保護協会が発行している「兵庫の自然シリーズ」は最新号が「兵庫の貝」だ。海水・淡水の貝から陸産の貝まで、兵庫県の貝を幅広く網羅している。「兵庫県の貝」と題して、菊池典男・安藤保二・近藤浩文の三氏が座談会を、陸産貝類については東正雄さんが貴重なデータを提供しておられる。

＊ ＊ ＊

貝の話題をもう一つ。六月十一日の読売新聞によると、〃貝博士〃と呼ばれる西宮市大浜町一、西宮回生病院名誉院長の菊池典男さんが私費で建設を進めていた「貝博物館」が六月末に完成する。同館には菊池さんが三十年にわたって世界中から採集してきた貝類約七千種、十萬点以上が陳列される。海の貝六千種、淡水貝二百種、陸貝七百種が集められている。個人で貝専門のこのような施設をつくるのは全国でも初めてのケース。

海文堂案内板

マリンプルールの海原を朝も夕も船がわたっていきます。

舞子の海は視界から船影が消えることがあります。お
おきい船も、ちいさい船も、陸（おか）から見ていると、
いかにも涼しげで伸びやかです。

★ 海文堂書店が神戸芸術文化会議議長・服部正さんの
エッセイ集『道化断章』を発行しました。服部さんの
四十三年にわたる、その時々への思いが短い文章の中
にさらめいて読む者をさわやかな気持ちにさせてく
れます。戦中の青春時代から今日にいたるまでの一人
の異色学者の感性の軌跡を、一緒に体験してみませ
んか。定価一五〇〇円。当店のほか県内の主要書店で発
売中です。

★ 先日、藤田多香子さんの詩集『扉』を当店清水部長
あてにお届けいただきました。ありがとうございます
た。藤田さんは、能登秀夫さんが主宰しておられた詩
誌「浮標」に寄稿しておられたと、あとがきで知り、

なつかしい人に会った気分になりました。

★ 店内の本を移動しましたのでお知らせします。

① 地方出版物・郷土の本コーナーをAブックプラザV
内の東側の棚に移しました。

② 地方出版物・郷土の本を陳列していた棚にはスポー
ツ関係の本を拡充してまいります。

★ ③ 二階海事書ゾーンの釣りの本はこのコーナーに集結
して、アウトドアにつながる本をぐんと増やします。
人文書ゾーンでは日本放送出版協会のシルクロード
関係の本をあつめたAシルクロードフェアVを開催中
です。同時に、二階への階段付近にシルクロードの写
真パネルを展示していますので、ご覧ください。

また、『昭和の歴史』（小学館）、『中国の歴史』
（平凡社）の各シリーズの完結をまって全巻完結フェ
アをおこなう予定です。

★ 二階ギャラリーの七月から八月にかけての企画は次
の通りです。

7月2日～10日 柏村勲展―海・ヨット―

7月11日～22日 南桂子の世界

7月28日～31日 世界の洋書（絵本）フェア

八月に入りますと、十三日から二十一日までA米倉
齊加年版画展Vを開催いたします。ご期待ください。

★ 文庫ゾーンでは文春文庫Aミステリー&サスペンス
フェアV、角川文庫A赤川次郎ブックフェアVを同時
に開催中です。

★ 新書ゾーンではアーバンライフの危険な部分を鋭く
指摘した三一新書のロングセラーを二十点あつめて

A商品のウソ・ほんとVと題するミニフェアを七月十五
日から開催します。

★ 東入口前のブックプラザでは七月一日から十五日ま
で留学の本をあつめたA留学をあなたにVを計画して
います。十六日から月末まではA恐怖の本A大集合V
あついで夏に幽霊やら心霊やらコワイ本が勢ぞろいしま
す。ぜひ、お立ち寄りください。

★ この「ブルーアンカー」もこの号が最終の号となり
ました。「週刊読書アラカルテ」の名で四〇号、「月
刊読書アラカルテ」の名で二十二号、そして「ブルー
アンカー」の名で十六号発行してきましたが、とうと

うこの号が最期になりました。休刊中も含めて、神戸
の一小書店がこのような書店誌を四年以上にわたって
刊行し続けることができたことは書き手の皆さんのあ
たたかいご協力と共に、読み手の皆さんの熱心な激励
があったからに他なりません。五〇〇部、四〇〇部、
三五〇部と部数はまちまちながらこのミニ書店誌
を読んでくださった皆さんに心から御礼を申しあげま
す。